

団体名	一般社団法人プレーワーカーズ		活動タイトル	遊びを通じた子どもの第3の居場所				
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）				■ 活動風景				
● 望ましい社会状況（ビジョン）	<p>「子どもが自由にのびのびと遊ぶことを通じて、心身ともに健康に育つことが、当たり前になることが理想。そのためには、自分で考え、判断し、自分の責任で遊び、生活していく「環境」が必要。</p> <p>また、不寛容で監視的な社会の中で、自己肯定感を育めず、遊ぶ意欲、生きる意欲を失っている子どもたちには、ありのままの姿を認めてもらうことが必要。それが、第3の居場所である。そこでの姿を社会に伝え、子どもにとって、より良い環境を社会全体で目指していくことが、私たちの望む未来である。</p>		遊び場の子どもたち	 <p>その日やりたい事を、一緒に居たい仲間と、夕暮れまで遊びます。</p>				
● 団体の社会的役割（ミッション）	<p>「子どもが遊び育つ社会を目指す」をミッションに掲げ、以下事業を行っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被災地支援事業（東日本大震災復興支援/台風19号被災地域支援） ・居場所づくり事業、キャンプ事業、調査研究事業 ・普及啓発事業、イベント出張事業、講師派遣事業、遊具製作事業 							
● 団体の活動基盤	<ul style="list-style-type: none"> ● 望ましい人的資源：プレーワーカー4名、事務局長1名、会計・労務の事務員1名。 ● 望ましい物的資源：①拠点となる常設の遊び場2ヶ所（名取・気仙沼）。②移動遊び場用の車両3台。③団体運営・広報等に使用する事務用品。 ● 望ましい活動資金：「寄付・会費」5%、「助成金」20%、「事業収益」30%、「行政委託」40%、「その他」5%、2,000万円～3,000万円規模。 ● 望ましい情報：①子どもを取り巻く環境を客観的に図る数値情報。②子どもの外遊びと成長発達に関するデータ。 ③プレイワーク（子どもの遊びの専門スキルと知識）の体系化。 							
■ 活動報告			■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)					
<p>● 子どもの野外遊び場づくり活動</p> <p>一軒家の庭を開放して子どもの自由な遊び場を開いた。木製遊具や泥遊び、水遊び、焚き火を通じて、親子がのびのび休んだり遊んだりする居場所づくりを行なった。</p> <p>● 子ども傾聴・相談活動</p> <p>遊びの中で子どもの傾聴を行ったり、保護者の相談を受けたりした。家でのごと、学校のごと、時には虐待とも疑われるケースもあり、児童相談所等に対応を相談した。</p> <p>● 普及啓発活動</p> <p>毎月の遊び場開催予定と遊んでいる子どもの様子をイラストでまとめた「プレーパークけんぬまつしん」を発行し、近隣の小学校の全児童、関係機関に配布した。配布の際に情報交換などを行なった。</p> <p>● 子どもの現状を伝える活動報告書の作成</p> <p>子どもの居ない世帯にも活動を周知するため、活動の目的、来場者数、子どもの声などを手書きでまとめた「地域向け報告書」を作成し、回覧板や手渡しで配布した。</p>			<p>● 子どもの野外遊び場づくり活動</p> <p>①開催 45回（当初計画52回を45回に変更）</p> <p>②目標アウトカム 自己肯定感を数値化する調査：1段階以上の増加は、比較できた38人中16人で、42%だった。（目標50%以上）</p> <p>● 子ども傾聴・相談活動</p> <p>①実施 35件（当初目標 年間30件）</p> <p>②目標アウトカム 25人中18人は不安感が解消された。（目標50%以上）</p> <p>● 普及啓発活動</p> <p>①実施 600部を9回発行（当初目標 10回を9回に変更）</p> <p>②目標アウトカム 1日平均10人だった来場者は平均19.7人に増加。（目標15人）</p> <p>● 子どもの現状を伝える活動報告書の作成</p> <p>①実施 100部を年2回発行（当初目標 年2回）</p> <p>②会員は18人→23人へ増加した。企業協賛は増やせなかった。（目標25人、1社）</p>			遊び場の大人たち	 <p>遊び場を整備しているボランティアに見えますが、実は、大人も遊びに来ています。</p>	
■ 事業を通じて得られたノウハウ			■ 望ましい社会状況を達成するための課題			■ 活動成果のアピールポイント（自由記入）		
<p>・自己肯定感の調査を行なった際、低学年の子どもは質問事項の意味（自分が誇れる、尊敬できる等）を理解することが難しかった。子どもの年齢に合わせた調査をするために、言葉を選ぶ必要があった。また、子どもが保護者の顔色を伺う仕草があり、保護者と距離を取って子どもにアンケートを取る必要がある。</p> <p>・子どもから相談を受けるタイミングは、一緒に何かの作業をしている時が多かった。作業をしている時、畑作りをしている時など。気になる子どもが居る時は、何気なく隣にいと、子どもが自分のタイミングで話してくれた。</p> <p>・利用者が参加しやすいように、「スタッフと利用者」という構図をつくらないように心がけた。子どもの声を聴いて遊具の形を変えたり、親達がイベントを企画して実施できるようサポートしたり、遊びに来た方の好奇心や意欲が反映できる場づくりを行った。そうすることで自分たちで作っていく居場所と感じ、「また来たい」と思ってもらえるように工夫した。</p>			<p>活動を通じて、不寛容で監視的な社会の中で、子どもも保護者も周囲を気にしながら生活している実態が見えた。これからの課題は「いかに子どもの声を聴くか」ということだと思ふ。「緊急事態」が続く社会の中で、子どもの声は小さく、大人に伝える事は容易ではない。しかし、活動の中で聴こえてくる声は子どもの今の暮らしや、将来、さらには命の危険に関わる声があり、軽視できないものだった。家族だと言いくいこともある。そのため家や学校以外に気軽に立ち寄れる居場所が必要だと思ふ。現実はそのような居場所を持っていない子どもが多く、家と学校を往復する毎日を過ごしており、その結果、子どもたちは静かに自分を押し殺していかかもしれない。これからの課題はまさに子どもの居場所をつくる事と、耳を傾ける大人を増やす事ができる新たな支援を検討している。実際、遊び場活動を通じて子どもの現状を伝えて来た地域の大人たちの中には、子どもの声に耳を傾けよう意識が変わって来ている様子を感じた。</p>			この1年間の活動を通じて	親子のべ889人利用し、自己肯定感アップと心の休息になる居場所づくり	を達成しました。
			■ 受益者の具体的な変化（自由記入）					
			<p>当初、年下を仲間外れにする、荒々しく物を壊すなどストレスが感じられる子どもが居たが、毎週活動が続ける中で少しずつ子どもの表情が柔らかくなっていった。アンケート調査では遊び場に来る頻度が高いほど自己肯定感が上がっている結果が出た。親達も子どもが遊ぶ間に休息をとったり、イベントを通じて活動に参加することで満足感を得られた様子だった。</p>					